

【題目】海の絵画における日本画材料の有効性**研究背景**

瀬戸の海に臨む土地で生まれ育ち、幼い頃から貝殻や、角の取れたガラスを拾いながら浜辺を散歩していた。足を波に差し込み、遠くに浮かんでいる島々を見つめ、波や風の優しい音に耳を澄ませ、風が運ぶ潮の香りを吸い込み、体全体で海を愉しんでいた。そして日本画と出会いその材料と制作の時間を過ごす中で、海を描こうと筆を動かしてみれば、このような懐古的な情景が記憶に甦り、思いの外のみり込み、以降海を題材にした制作を重ねている。制作の下準備となるスケッチを溜めるために向かう場所も、近辺の海岸に留まらず遠く離れた海岸へ出掛ける事も増え、土地や気候、時間帯によって姿を変える海の魅力に気付く度に、制作の構想も膨らんでいく。何度海を描いても飽きを覚えないのは、こうして様々な海の表情を見付ける事が出来るからであり、景色の中で体感したり考えたりした事を、現場の姿を借りて再び絵として形に出していくのが嬉しいのだ。

構図や表現の手法を変えながら描き続けている事を振り返れば、初めこそ、海の景色の絵として一般的だと思われるような構図を取っており、波打ち際から水平線にかけての景色を描き、浜、波、空といった、海岸で見渡せる全ての要素を画面に取り入れている。徐々に、海原の有様を画面一杯に広げた構図を試みたり、波の飛沫や泡を模様のようにして幾つかパターンを作ったり、色面分割を強調させて平面的な画面にしたりと、目に映る実際の景色を意図的に変えて描こうとしているのが見て取れる。これに伴い視点の設定や色調の選び方も変化し、地面に立って自然な姿勢で眺めたものだけではなく、上から俯瞰したもの、足下ぐらいの視点、水中に入り込んだイメージのものを描き、色彩の選択では、例えばほとんどの場合海といえば青色を思い浮かべるが、制作を重ねていると青色の色幅を出す事以外にも、視覚だけでなく触覚、聴覚も働かせて浮かんでくるイメージを反映させた色を探す等の取り組みをするようになる。しかし、単純に構図や色調を変える事で自制作の展開を図ろうとするのに、日本画材料を選ぶ事は不可避ではないから、その部分にもどかしさを感じる。自分は何故、日本画を選んで海を描き続けるのかと、日本画でしか描けない世界を見つけないかと描く手前、材料に触れる度に悩むようになる。この体験が、海の題材が日本画材料の持つ魅力を引き出し、材料もまた、絵の中の世界を広げている事を、制作を通して示していこうとする行動に繋がっていく。

研究主題

我が国の歴史と共に受け継がれてきたこの材料で、海を描く制作に興味関心を抱く事を前向きに捉えている。日本を囲む海には太平洋、日本海、瀬戸内海など、複数の名称が付けられている事からも「海の国」と呼ばれるに相応しく、国土の小ささにも関わらず、潮流、地質、地形の特徴が絡み合っているせいで、印象の異なる海岸が多く存在している。これらの海の景色には、海原の色、岩場や入り江の形、波のボリュームや広がり方などによる表情の違いが顕著に表れ、その特徴は以前より多くの美術品の中で目を惹くポイント

として活かされている。だから美術に触れている筆者自身も、海の景色の魅力を制作活動に繋げている事は自然な動機として掲げているし、海は制作の内容を絶えず豊かに、嬉しいものへと導いてくれると、確信を持って描き続けている。そして、美術の領域において世に溢れる様々な題材、材料で様々なテーマが次々と表現されていくこの世の中で、国土を包み、太古の昔から日本人の美的感性を振るわせてきた海を題材として、同じように我が国で長い歴史を持つ材料で描く事にこれほど強い意義を孕んでいるものは無いと考えている。

また、制作では、顔料となる岩絵具を重ねる事によって生まれる色調の幅や岩絵具の粒子の動き方、置き方に気を配る事しか表現方法を見出せずにいたが、徐々に、それ以外の材料が持つ特性を活かし、画面上で出せる表情の幅を広げる事に意識が向くようになる。例えば、岩絵具の質感だけでなく、染料系の絵の具が紙に浸透していく様、種類が異なる紙の特徴、金属箔の輝きを活かして作れる表情も取り入れ、海の表現がより豊かに見えてくる事を目指すようになっていく。題材と材料と技法の効果の結びつきが表面に見えてくるようにすれば、多くの人に材料が持つ質感の魅力や、材料が絵の世界を美しく、面白く、豊かにしている事実を伝える事が出来ると同時に、日本画材料が海の絵画表現を通して大きな価値を持つものである事も確認していける。

研究方法

第1章では、名品として現在まで残されている絵画作品の中で、海が題材になっているものを挙げていき、当時にあった海の表現や表現に対する材料の使われ方に注目していく。先人作家は自然に対する洞察力が現代に生きる者よりも格段に鋭い筈であり、作品には作家たちの思惑が、繊細な材料の使い方と共に見て取れる部分が多い。作家の絵画表現と向き合う姿勢、海を捉える眼差しを探る事で感じる、日本美術を代表する絵画技法で、日本特有の自然風景を描く事の価値を自制作に繋げていく。

第2章から第7章では、海の題材と材料の特性の繋がりに対する筆者の存意を、海の景色の要素に分けて述べていく。波に揺らめく光や泡模様、浜辺に広がる微かな砂紋と海の湿った空気、霞んで見えても海をしっかりと象る水平線といった、海にあるものの表情や、泥浜の平滑な景色もあれば岩壁で隆々とした印象の景色もある海岸の雰囲気など、自制作の動機になる部分が、日本画材料と技法によってどのように表現されてくのかをまとめる。そこでは、顔料、箔、紙などを扱う時に施す工夫によって表れる効果を推察しながら、絵を完成させていく工程の説明も添える。そして制作で表れた成果から、日本画材料は海の題材を通して、絵画領域において大きな価値を有している事を証明していく。

目次

はじめに 一海を題材に日本画を考える一

第1章 海の表現

第2章 波の表現

第3章 岸辺の表現

第 4 章 岬、岩場、断崖の表現

第 5 章 水平線の表現

第 6 章 海に対する空の表現

第 7 章 水の無い海

おわりに